

さいたま国際芸術祭2023

令和5年7月
さいたま国際芸術祭実行委員会



開催概要

2023年10月7日(土)－12月10日(日)[65日間]

目次

- 1 ごあいさつ
- 2 プロデューサー | ディレクター紹介
- 3 基本情報 | 開催テーマ
- 4 ロゴデザイン | ロゴタイプ
- 8 さいたま国際芸術祭2023 4つのキーワード
—— アートプロジェクト メイン会場参加アーティスト
- 12 市民プロジェクト
—— 市民プロジェクト・キュレーターによるプログラム
—— 公募プログラム | 応援プロジェクト | 市民サポーター
- 17 連携プロジェクト
- 18 開催エリア
- 20 会場
- 22 メイン会場チケット
- 23 実施体制
- 24 お問い合わせ

ごあいさつ

「さいたま国際芸術祭2023」は、さいたま市が定めた将来像である「生き生きと心豊かに暮らせる文化芸術都市」の創造に向けた象徴的・中核的な事業として、3年に一度開催している芸術の祭典です。これまでの国際芸術祭では、国内外のアーティストと共に、市民と市民、市民とアーティスト、アーティストと地域が交流する機会の創出に努めてきました。

3回目の国際芸術祭となる今年は、政令指定都市移行20周年事業として、市民の皆様と祝うとともに、これまでの国際芸術祭から引き継がれたコンセプトである「共につくる、参加する」を念頭に、134万人が暮らす上質な生活都市における市民参加型の芸術祭として皆様と一緒に創り上げていくことを目指していきます。

今回の国際芸術祭では、「さいたまトリエンナーレ2016」にもアーティストとして参加した、現代アートチーム 目[mé]をディレクターとして迎えました。都心からほど近く、多様な生活空間を生み出すさいたまで、人々の日常生活の延長線上で起こる出来事をいかに、自らの出来事としてとらえ、さいたまから日本を、更には世界を、もう一度「みる」ことができるのかという問題提起から、「わたしたち」を今回の国際芸術祭のテーマとして掲げました。

会期中は、メイン会場の旧市民会館おおみやを中心に、国内外で活躍するアーティストによる最先端の作品や現代美術、音楽、ダンス、演劇などといった多様な文化芸術作品による発信を行います。また、多くの市民の皆様が文化芸術を気軽に体験できるプログラムや日頃より文化芸術活動を行う方々の発表の場を数多く設けます。さらに、市内文化施設においても、盆栽・漫画・人形・鉄道といった、さいたま市の魅力ある資源を活用した本市ならではの作品を展示し、さいたま文化の発信を図ります。

文化芸術は、人々の創造性を豊かにし、生活にゆとりをもたらし、豊かな人間関係を育むものであり、これからの社会生活にとって一層重要な意義を持つものです。「さいたま国際芸術祭2023」は、市民の皆様一人ひとりが「わたし」だけの大切な固有の体験を得るとともに、「わたしたち」の繋がりを考え、文化芸術の持つ力を実感いただける絶好の機会となりますので、どうぞご期待ください。

さいたま国際芸術祭実行委員会会長
清水勇人
(さいたま市長)



プロデューサー | ディレクター紹介

プロデューサー

芹沢高志 SERIZAWA Takashi

P3 art and environment 統括ディレクター

1951年東京都生まれ。神戸大学、横浜国立大学を卒業後、生態学的土地利用計画に従事。1989年にP3 art and environmentを開設し、1999年まで萬亀山東長寺境内地下講堂をベースに活動、以降は場所性に注目したさまざまなプロジェクトを展開する。とかち国際現代アート展『デメーテル』総合ディレクター(2002)、横浜トリエンナーレ2005キュレーター、別府現代芸術フェスティバル『混浴温泉世界』総合ディレクター(2009～2015)、さいたまトリエンナーレ2016ディレクター、さいたま国際芸術祭2020参与等を歴任。



撮影 | 阿部 健

南川(左)、荒神(中央)、増井(右)

ディレクター

現代アートチーム 目[mé]

アーティストの荒神明香、ディレクターの南川憲二、インストーラーの増井宏文の3人を中心とする現代アートチーム。個々の技術や適性を活かしたチーム・クリエイションによる制作活動を展開。観客を含めた状況／導線を重視し、「我々の捉える世界の“それ”が、“それそのもの”となることから解放する」作品を様々な場所で発表している。

主な作品

- 2021《まさゆめ》Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13 (東京各所)
- 2019《非常にはっきりとわからない》千葉市美術館 (千葉)
- 2017《repetition window》Reborn-Art Festival 2017 (宮城)
- 2016《Elemental Detection》さいたまトリエンナーレ2016 (埼玉)
- 2014《たよりない現実、この世界の在りか》資生堂ギャラリー (東京)

荒神明香 KOJIN Haruka

アーティスト。1983年広島県生まれ。2009年東京藝術大学大学院美術研究科修了。サンパウロ近代美術館(ブラジル)、ジャパン・ソサエティー(ニューヨーク)、ボンビドゥーセンターメッス(フランス)など国内外で作品を発表。Art Award Tokyo 2007 グランプリ受賞、東京藝術大学卒業制作展 買い上げ賞、作品《reflectwo》東京都現代美術館、サンパウロ現代美術館所蔵。

南川憲二 MINAMIGAWA Kenji

ディレクター。1979年大阪府生まれ。2009年東京藝術大学大学院美術研究科修了。wah document(わうどきゅめんと)(2006～)として、カウス・アウストラリス(オランダ)、オーセージギャラリー(香港)、ボンビドゥーセンターメッス(フランス)など国内外で活動を展開。東京藝術大学終了制作展 川俣正賞、Art Award Tokyo丸の内2009 グランプリ受賞。

増井宏文 MASUI Hirofumi

インストーラー。1980年滋賀県生まれ。2008年佛教大学教育学部卒業。2004年成安造形大学造形学部卒業。wah document(わうどきゅめんと)(2006～)として、カウス・アウストラリス(オランダ)、オーセージギャラリー(香港)、ボンビドゥーセンターメッス(フランス)など国内外で活動を展開。



《まさゆめ》2019-2021, Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13, 撮影 | 津島岳央

基本情報 | 開催テーマ

1 — 名称

さいたま国際芸術祭2023
《愛称》Art Saitama2023

2 — テーマ

「わたしたち」(日)
“We” (英)

3 — 目的

- (1) 「さいたま文化」の創造・発信
- (2) さいたま文化を支える「人材」の育成
- (3) さいたま文化を活かした「まち」の活性化

4 — 会期

2023年(令和5年)10月7日(土)～
12月10日(日) [65日間]

メイン会場開館時間 | (日・火～木) 10:00～18:00
(金・土) 10:00～20:00

[最終入館は閉館30分前まで]

メイン会場休館日 | 月曜[祝日の場合は開館、翌日休館]

5 — 事業展開

- (1) アートプロジェクト
- (2) 市民プロジェクト
- (3) 連携プロジェクト

6 — 会場

メイン会場 | 旧市民会館おおみや

その他会場 | RaiBoC Hall (市民会館おおみや)、氷川の杜ひろば(大宮図書館)、大宮盆栽美術館、漫画会館、岩槻人形博物館、鉄道博物館、埼玉県立近代美術館、うらわ美術館、さいたま市文化センター、その他市内各所

7 — 主催

さいたま国際芸術祭実行委員会
※政令指定都市移行20周年事業

8 — プロデューサー

芹沢高志

9 — ディレクター

現代アートチーム 目 [mé]

10 — 市民プロジェクト・キュレーター

浅見俊哉、飯島浩二、松永 康

11 — メイン会場チケット

| | | | |
|----|-------|--|--------------------------|
| 前売 | 1DAY | | 一般 1,500円 (さいたま市民1,000円) |
| | フリーパス | | 一般 4,000円 (さいたま市民2,500円) |
| 当日 | 1DAY | | 一般 2,000円 (さいたま市民1,500円) |
| | フリーパス | | 一般 5,000円 (さいたま市民3,500円) |

さいたま国際芸術祭2023 開催テーマ 「わたしたち」

あなたにとって「わたしたち」とは、誰を指すだろう。

日本を代表する「生活都市」さいたま。人々が日本の中心地へ向かい、そして戻ってくる場所。中心へ、あるいは発展の一途へと脈々と続けられる人間の行動を、とても間近に、そしてそっと側から眺める都市。確たる「主体」というような、積極的な視点からは少しだけ身を引いた、漠然とした感性のあわいが留まる地。この地域には語りきれないほど多種多様の魅力がある。しかし、それをこうだと決定づけようとした瞬間、何かふっと大切なものが失われてしまう、そんな感覚を伴うことがある。いつの間にか加担してしまうこの現実世界から少し距離を取るために、私が尚も「わたし」であり続けるために、決して誰かに明確に語られることなく、とても密やかに日常に繰り広げられる、人間の「無自覚」への微かな抵抗。

この客体的な空間 さいたま から、芸術祭を、そして都市を、更にはこの世界を、もう一度「みる」。気候変動、社会格差、分断、戦争。現代社会を取り巻く、もはや私たち自身の加害性を抜きに語るこのできない様々な問題。この時代を生きる私たちは、一体どのように「わたし」の延長線上に、この世界を捉えることができるだろう。あらためて、私たちが「わたしたち」をみる。そんな機会を、このさいたまの地から届けたい。

現代アートチーム 目 [mé]

ロゴデザイン | ロゴタイプ

最小単位の「ドット」をロゴ化。

固定されたロゴではなく、随時変化／変容するロゴ。



ロゴ・コンセプト「わたしたち」

このテーマを受け作ったのは、「ドット=わたし」の集まったロゴ。

個々が集まり、ひとつのムーブメントを形作る。

「わたし」は自由に動くこともできるし、

集まれば「わたしたち」となり、流れを生み出すこともできる。

集まり離れ、また、集まる。

意志を持って、「わたし」は「わたしたち」に参加する。

高田 唯 (Allright Graphics)

さいたま国際芸術祭2023 デザイナー

高田 唯 TAKADA Yui (Allright Graphics)

グラフィックデザイナー。桑沢デザイン研究所卒業後、2006年にデザイン事務所Allright Graphics、翌年に活版印刷工房Allright Printingを設立。国内外のロゴ、サイン、広告、装丁、パッケージデザインなどを手がける。2017年、個展『遊泳グラフィック』をクリエイションギャラリー G8で開催後、台湾(台中)と上海、北京でも個展を開催。2022年7月にはギンザ・グラフィック・ギャラリーでの個展開催。開催に併せて作品集も出版。2011年JAGDA 新人賞、2015年日本パッケージデザイン大賞金賞・桑沢賞、2019年ADC賞、2020年TDC賞、2022年JAGDA賞受賞。東京造形大学教授。JAGDA会員・AGI会員。

ロゴパターン例



Art Saitama 2023

さいたま国際花博祭2023





さいたま国際芸術祭2023

4つのキーワード



営みの集合体

目[mé]のディレクションによるメイン会場(旧市民会館おおみや)は、開催期間中、日々変化し続ける。大ホールでは音楽ライブ、パフォーマンス・アーツの公演、映画上映など多様な演目を開催。公演のない日にもそれらの準備やリハーサル風景を公開する。加えて、各展示室には写真や彫刻、インスタレーションの展示、なかには日によって変化する展示作品もある。また、市民プロジェクト・キュレーターらが中心となって展開する芸術祭会期以前から継続されてきた「市民プロジェクト」や、さいたま市の文化芸術資源との連携を計る「連携プロジェクト」など、さまざまな展示やイベントが市内各所で展開され、芸術祭期間中、さいたまの街に膨大な“営みの集合体”が発生する。



スケーパー (SCAPER)

例えば「絵に描いたような画家」の格好をした風景画家や、まるで計算されたかのように綺麗に並べられた落ち葉など、パフォーマンスとそうでないものの差が曖昧になる仕掛けを多数展開する企画。メイン会場の内外や、さいたま市内各所にも仕掛けられるスケーパー。目[mé]以外にも、演出家や研究者など複数のクリエイターによって計画され、毎日各所に続々と現れる。いつどこに出現するかは、クリエイター同士の間でも知らされない。スケーパーという曖昧な存在は、その実態の有無を観客自身が判断することで現れる。本芸術祭の体験を一層、観客の経験に引き寄せる試み。



さいたま

本芸術祭のプランは、テーマも含め、目[mé]の活動拠点が長年さいたまにあることも深く関係している。ひたすら発展を目指す大都市のすぐ側で、人間のある種の無自覚を感じながら、それを否定することなく、そこにある“心地”を捉える。しかしそれは、何か具体的な言葉にしようとした瞬間、ふっと逃げていくような曖昧でささやかなもの。そんな、確かに“ここにある感覚”を芸術祭に残すことを目指して、さまざまなプログラムが展開される。



もう一度「みる」

多くの活動が同時展開する「営みの集合体」、観客に実態が委ねられる「スケーパー」、「さいたま」という地の感覚。それらすべては絶え間なく動き続け、会期中も変わり続ける。いつも同じ体験が約束された会場ではなく、あえて観客が多くを“見逃してしまう状況”を設定することで、その場所・その瞬間の観客の体験が誰にも奪えない固有のものとなる。“サイト・スペシフィック”^(※)から“タイムベース”へ——。いつ、どこで、誰と、どんな状態でそれを体験したか。その日の天候、下車した駅、歩んだルート、ふとしたきっかけで目に止まる景色まで。観客の歩んだ行為そのものが芸術祭の体験となり、それがこの街やこの世界を、あらたな目でもう一度「みる」ことに繋がる。そんな機会の創出を目指す。

※サイト・スペシフィック：美術作品が“特定の場所に帰属する”性質を示す用語。
出典 | 暮沢剛巳, artscape「現代美術用語辞典1.0」
https://artscape.jp/dictionary/modern/1198204_1637.html

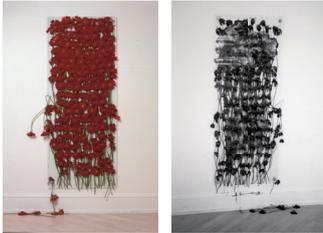
アートプロジェクト メイン会場参加アーティスト

目 [mé] ディレクションによるメイン会場には、国内外から多様なアーティストが参加。大ホールでは、音楽コンサート、新作パフォーミング・アーツの公演、映画作品の上映、市民文化団体による公演などのさまざまな演目を展開。また、それらの準備風景も連日公開する。加えて、メイン会場各展示室には、美術家、写真家、編集者、盆栽師などによる作品を展示。なかには日によって変化する作品なども展開。



公式WEBサイト
イベント情報

アーニャ・ガラッチオ Anya GALLACCIO



Anya Gallaccio 《Preserve 'Monica'》(Galerie Ars Futura, Zurich, Switzerland / 1993) Installation view © Anya Gallaccio, Courtesy the artist and Thomas Dane Gallery. Photo | Maniscalco Milano

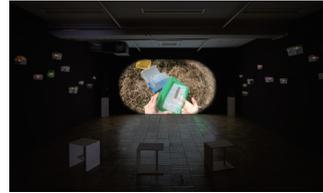
アーティスト

生年 | 1963年

出身 | イギリス/ペイズリー

花、ろうそく、氷といった有機物が自然に変容し、崩壊していくシンプルで力強いインスタレーション作品を1990年代から発表。2003年、ターナー賞にノミネートされた。現在カリフォルニア州サンディエゴとロンドンを拠点に活動。

荒川弘憲 ARAKAWA Koken



荒川弘憲 《Jamscape Insectcage》(東京藝術大学 / 2021) 展示情景

アーティスト

生年 | 1993年

出身 | 日本/東京

現在のメディア環境におかれている“物”と、幼年期の“人間”との関係をテーマに、初々しい知覚が生まれるような作品を制作。2021年、東京藝術大学先端芸術表現科卒業。本芸術祭では、“見沼たんぼ地域”をフィールドワークしながら新作を制作予定。

イェンズ・パルダム Jens PALDAM



Jens Paldam, Live at the Chiba City Museum of Art 2019. Photo | Fujiki Yusuke

電子音楽作曲家

生年 | 1979年

出身 | デンマーク/オーフス

モジュラーシンセサイザーを使い、フィールドレコーディングを電子音楽に取り入れたパフォーマンスを行う。本芸術祭では、さいたま市内に滞在しサンプリングした多様な音を使用して新たな楽曲として演奏するライブパフォーマンスを予定。

伊藤比呂美 ITO Hiromi



詩人

生年 | 1955年

出身 | 日本/東京

「生きる」と「死ぬ」を見つめ、いまを生きる女の視点から詩を綴る。子育て、犬との暮らし、死にゆく親との関わり、仏教への興味など、自らの体験を投影した作品を精力的に発表。海外生活を経て、現在は熊本在住。『とげ抜き新築鴨地蔵縁起』『女の一生』『よいおっぱい悪いおっぱい』他著書多数。

今村源 IMAMURA Hajime



今村源 《きせい・キノコ》(リボンアート・フェスティバル2019 / 社鹿半島・宮城)

美術家

生年 | 1957年

出身 | 日本/大阪

1980年代半ばよりボール紙、針金など軽い素材を用いて制作を開始。日用品などありふれた物も用いながら、目に見えない関係や領域の表出を目指す。キノコへの興味を展開し、場所と関わりながら大規模な作品制作も手がける。近年では“私”について考える制作を継続。本芸術祭では、メイン会場にて新作を発表予定。

エム・ジェイ・ハーパー MJ HARPER



ダンサー/振付師

生年 | 1987年

出身 | ジャマイカ/ポートアントニオ

ベルリンを拠点に活動。ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館やサーペンタイン・ギャラリーなど様々な空間でパフォーマンス作品を発表。近年は振付師としてファッションにおける身体表現を追求。本芸術祭では、編集者・川島拓人らと新たなファッションショーを発表する。

《Intimate Evening Performance》(Blain|Southern Berlin / 2018)

L PACK. L PACK.



L PACK. 《彫刻のある喫茶店「NEL MILL」》(山形ビエンナーレ2018「山のような100ものがたり」) Photo | Masaru Yanagiba

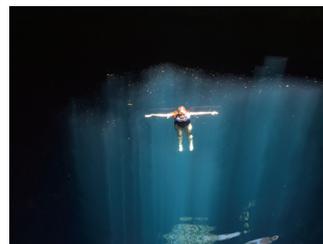
アーティスト

生年 | 共に1984年

出身 | 日本/静岡 (中嶋哲矢)
日本/青森 (小田桐 葵)

小田桐 葵と中嶋哲矢によるユニット。静岡文化芸術大学空間造形学科卒。アート、デザイン、建築、民藝などの思考や技術を横断しながら、最小限の道具と現地の素材を臨機応変に組み合わせたプロジェクトを展開。日用品店「DAILY SUPPLY SSS」も営む。

小田 香 ODA Kaori



フィルムメーカー/アーティスト

生年 | 1987年

出身 | 日本/大阪

〈映画作品『セノータ』と短編作品『OUR CINEMAS』を上映〉
イメージと音を介して「人の記憶のありか」「人間とは何か」を探求。ボスニアの炭鉱を主題とした『鉱 ARAGANE』(2015)が「山形国際ドキュメンタリー映画祭」アジア千波万波部門・特別賞を受賞。『セノータ』(2019)が第1回(2020)大島渚賞、第71回(2021)芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

『セノータ』(小田香監督 / 2019) ©Oda Kaori



オルヤ・オレイニ Olya OLEINIC



リソグラフを活用したモノクロの写真集

ヴィジュアル・アーティスト/
フォトグラファー

生年 | 1991年
出身 | モルドバ共和国

アムステルダムとパリを拠点に、社会的・文化的問題を切り取るアーティスト。『M le Monde』『Wallpaper*』などのカルチャー誌ほか、ファッションブランド「Chloé」や「Maison Margiela」などの広告も手がける。本芸術祭では、編集者・川島拓人と共に市民の日常に目を向けたポートレイトを撮影。

グザヴィエ・ドラン Xavier DOLAN



『たかが世界の終わり』(グザヴィエ・ドラン監督/2016)
© Shayne Laverdière, Sons of Manual

映画監督/俳優

生年 | 1989年
出身 | カナダ/モントリオール

〈映画作品『たかが世界の終わり』を上映〉6歳の頃より子役として映像作品に出演。脚本・演出も務めた監督デビュー作『マイ・マザー』(2009)がカンヌ映画祭監督週間部門に選出。2014年、監督・脚本・編集・衣装デザイン・出演を務めた『Mommy/マミー』でカンヌ国際映画祭コンペティション部門審査員特別賞を受賞。続く本作で同映画祭のグランプリを受賞。

近藤良平 KONDO Ryohei



ジャンル・クロス | 近藤良平 with 長塚圭史『新世界』(彩の国さいたま芸術劇場/2022)
Photo | MIYAGAWA Maiko

振付家/ダンサー

生年 | 1968年
出身 | 日本/東京

彩の国さいたま芸術劇場芸術監督。1996年にダンスカンパニー「コンドルズ」を旗揚げ、全作品を構成・演出・振付。世界約30か国で公演。TV・映画・演劇において多数の振付や出演をしている。第4回朝日舞台芸術賞寺山修司賞、第67回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。本芸術祭では、「SCAPER」を独自の視点から演出する。

ジム・オルーク Jim O'ROURKE



Photo | KINO Eigen

音楽家/作曲家/プロデューサー

生年 | 1969年
出身 | アメリカ/シカゴ

10代後半よりギターの即興演奏を本格的に始め、実験的要素の強い作品を発表。多種多様な領域で音楽、映画に携わる。Wilcoをはじめ多くのアーティストのレコードをプロデュースし、マース・カニングハム、坂田明らと共に演。ヴェルナー・ヘルツォーグ、若松孝二監督作品等の映画音楽を担当している。

白鳥建二 SHIRATORI Kenji

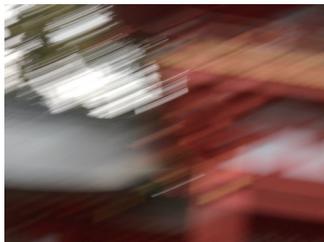


Photo | SHIRATORI Kenji

写真家

生年 | 1969年
出身 | 日本/千葉

2005年頃からデジタルカメラで写真を撮り始め、一人で歩くときに撮影するのが習慣になっている。2014年水戸芸術館現代美術ギャラリー、ジョン・ヨンドウ「地上の道のように」作品協力。2021年「はじまりの美術館」など多くの展覧会に出展。本芸術祭ではさいたま市内各所を撮影。「見る」ことを問う、芸術祭を象徴する写真表現として様々なかたちで展開される。

川島拓人 KAWASHIMA Takuhito



インタビュー誌『PARTNERS』

編集者/クリエイティブディレクター

生年 | 1986年
出身 | アメリカ/ニューヨーク

2015年にクリエイティブエージェンシー「kontakt(コンタクト)」を設立。以降、国内外のファッションブランドなどの広告を手掛けながら、2017年にインタビュー誌『PARTNERS(パートナーズ)』を刊行。本芸術祭では、複数の写真家やさいたま市の小学生と共に、市内で生活する人々を撮影する「ポートレイト・プロジェクト」、メイン会場で展開する“ファッションショー”を企画。

倉田 翠 KURATA Midori



倉田翠『今ここから、あなたのことが見える/見えない』(2022)

演出家/ダンサー

生年 | 1987年
出身 | 日本/三重

3歳よりクラシックバレエ、モダンバレエを始める。作品ごとに自身や他者と向かい合い、そこに生じる事象を舞台構造を使ってフィクションとして立ち上げらせることで「ダンス」の可能性を探索する。akakilike主催。セゾン文化財団セゾン・フェローI。本芸術祭では市民らと共に新たな作品を創作予定。

市民文化団体



メイン会場(旧市民会館おおみや)大ホール

ジャズ、吹奏楽、和太鼓、合唱など、さいたま市内で活動する市民文化団体によるさまざまな公演を、練習や準備風景を含めて、芸術祭メイン会場大ホールにて公開する。

【参加団体】

岩槻 Jazz / 浦和ギターマンドリンクラブ/コカリナ・オーケ/埼玉県立大宮光陵高等学校合唱団/さいたま市浦和吟剣詩舞道連盟/さいたま市音楽家協会/さいたま市立浦和高等学校吹奏楽部/さいたま市立白幡中学校ダンス部/埼玉大学吹奏楽部/さいたま和太鼓振興会/市内アマチュアオーケストラ有志

沙青(シャ・チン) SHA Qing



『孤独な存在』(沙青監督/2016)

映画作家

生年 | 1965年
出身 | 中国/北京

〈映画作品『孤独な存在』を上映〉監督デビュー作『一緒にいる時』がYIDFF 2003アジア千波万波で小川紳介賞、ヴィジョン・デュ・レル国際映画祭など、数々の国際映画祭にノミネート。本芸術祭では、2010年製作の『FADING REFLECTIONS』を発展させ、他者や自己を見つめることの根源を問う長編ドキュメンタリー映画『孤独な存在』を発表する。

田口陽子 TAGUCHI Yoko



〈スケーパー研究所〉

都市・建築研究者

生年 | 1975年
出身 | 日本/岐阜

専門は都市・地域計画、まちづくり、公共空間デザイン、地域施設計画。博士(工学)。2017年より東洋大学理工学部建築学科准教授。本芸術祭においては、謎めいた「SCAPER」を都市・建築論の観点から研究する「スケーパー研究所」の所長として参加。研究所員等とともに独自の視点で調査研究に取り組む。

谷口真人 TANIGUCHI Makoto



《Untitled》2022
©Makoto Taniguchi Courtesy of the artist and NANZUKA

アーティスト

生年 | 1982年
出身 | 日本/東京

絵やCG、アニメーション、コンピュータを用いたインタラクティブなインスタレーションなど複数のメディア、形態の作品を制作。現実とフィクションの存在、「私」と他者、物質と非物質等の間を巡る人間の想像力やフィリングを探索。東京、ニューヨーク、ロサンゼルスなど、国内外で作品を発表している。

テリー・ライリー Terry RILEY



「横尾忠則×テリー・ライリー ライブパフォーマンス」(豊島橋尾館/2022)
Photo | IKEDA Masahiro

音楽家/作曲家

生年 | 1935年
出身 | アメリカ/カリフォルニア

1964年発表『in C』で「ミニマル・ミュージックの父」として脚光を浴びるが、その本質は「サイケデリック」。横尾忠則、久石 譲をはじめ、数多くの日本の表現者に影響を与える。2020年より山梨県在住。

濱口竜介 HAMAGUCHI Ryusuke



『Happy Hour』(濱口竜介監督/2015)
©2015 KWPC

映画監督

生年 | 1978年
出身 | 日本/神奈川

〈映画作品『Happy Hour』を上映〉
5時間を超える長編『Happy Hour』(2015)で、ロカルノ国際映画祭ほかで主要賞を受賞。『ドライブ・マイ・カー』(2021)は、第74回カンヌ国際映画祭脚本賞ほか4冠、第94回米国アカデミー賞国際長編映画賞に輝いた。現在、世界から最も注目される映画作家のひとり。

プットィポン・アルーンペン Phuttiphong AROONPHENG



『Mantalee』(プットィポン・アルーンペン監督/2018)

映画作家

生年 | 1976年
出身 | タイ/バンコク

〈映画作品『Mantalee』を上映〉
シラパコーン大学で美術を専攻、ニューヨークで映像制作を学ぶ。2007年、福岡アジア美術館に滞在し、短編作品を制作・発表。短編作品『観覧車 (FERRIS WHEEL)』(2015)は20以上の映画祭で上映され、数々の賞を受賞。『Mantalee』(2018)が初の長編監督作品となる。

ミハイル・カリキス Mikhail KARIKIS



ミハイル・カリキス《Ain't Got No Fear》(2016)
Photo | Courtesy of the artist.

アーティスト

生年 | 1975年
出身 | ギリシャ/テッサロニキ

コミュニティと協力し、社会・政治・環境問題に注目した映像作品やサウンドパフォーマンスを制作。注意喚起や共感により、人間の行動と連帯のもうひとつのあり方を描き出す。「第54回ヴェネチア・ビエンナーレ」(2011)、「第19回シドニー・ビエンナーレ」(2014)など国際的に作品を発表。本芸術祭では、さいたま市内の高校生らが参加する新作を発表予定。

短編アニメーション・プログラム



『サカナ島胃袋三腸目』(若林 萌監督/2022)

若林 萌 WAKABAYASHI Moe
アニメーション作家/イラストレーター
生年 | 1992年 出身 | 日本/神奈川
金子勲矩 KANEKO Isaku
アニメーション作家
生年 | 1994年 出身 | 日本/静岡
小野ハナ Onohana
アニメーション作家/画家
生年 | 1986年 出身 | 日本/岩手

日本の若手アニメーション作家が手掛ける作品を紹介するプログラム。若林 萌監督『サカナ島胃袋三腸目』(2022)、金子勲矩監督『Magnified City』(2022)、小野ハナ監督『Such a good place to die』(2014) を上映。

テレンス・マリック Terrence MALICK



『ボヤージュ・オブ・タイム』(テレンス・マリック監督/2016)
©2016 Voyage of Time UG (haftungsbeschränkt). All Rights Reserved.

映画監督/脚本家

生年 | 1943年
出身 | アメリカ/オタワ

〈映画作品『ボヤージュ・オブ・タイム』を上映〉
ハーバード大学で哲学を専攻、その後オックスフォード大学に留学中退。『天国の日々』(1978)でカンヌ国際映画祭の監督賞を受賞。『シン・レッド・ライン』(1998)でベルリン国際映画祭の金熊賞を受賞、『ツリリー・オブ・ライフ』(2011)はカンヌで最高賞パルムドールを受賞している世界的な映画監督のひとり。

平尾成志 HIRAO Masashi



平尾成志《五葉松樹齢70年》
Photo | MASAYUKI NISHIMOTO

盆栽師

生年 | 1981年
出身 | 日本/徳島

重森三玲作・方丈庭園(東福寺)に感銘を受け盆栽の創作をはじめ。加藤蔓青園(さいたま市盆栽町)に師事。現在、国内外でパフォーマンスやワークショップを多数展開。即興と伝統技法の間に立ち、忘却と習得を繰り返しながら新たな盆栽の可能性を追求している。平成25年度文化庁文化交流使として世界11カ国を訪問。さいたま市西区の盆栽園「成勝園」園主。

マーク・ペクメジアン Mark PECKMEZIAN



ポートフォリオ『Portraits of twins for Gucci』より

フォトグラファー

生年 | 1985年
出身 | カナダ/トロント

ベルリンを拠点に活動するフォトグラファー。「Gucci」「Hermès」の広告ほか、『Fantastic Man』『The New York Times』などの雑誌に寄稿。2021年には、旅先で通りすがりの若者のポートレイトを撮影した作品集『NICE』を刊行。本芸術祭では、編集者・川島拓人と共に、街ゆく市民を対象にしたポートレイトを撮影。

村川拓也 MURAKAWA Takuya



村川拓也『ムーンライト』(2018)
Photo by Hyogo Mugyuda (umiak)

演出家/映像作家

生年 | 1982年
出身 | 日本/滋賀

ドキュメンタリーやフィールドワークの手法を用いた作品を、映像・演劇・美術などさまざまな分野で発表。虚構と現実の境界に生まれる作品は、表現の方法論を問い直すだけでなく、現実世界での生のリアリティとは何かを模索する。本芸術祭では新作公演を予定。

共につくる、
参加する

市民プロジェクト

あらゆる市民が参加し、ともに作りあげるプロジェクト。市内在住のアーティストも参加し、市内全域で多彩なプログラムを展開する。3名の市民プロジェクト・キュレーター、市民サポーターは芸術祭初回の2016年より続く活動が多く、文化芸術活動がこのまちに根ざし、育まれていることを発信する。

●市民プロジェクト・キュレーターによるプログラム

●公募プログラム

●応援プロジェクト

●市民サポーター



芸術祭をともに作りながらも、それぞれが独自の活動を展開する市民プロジェクトのあり方をロゴでも表現できるよう、形態を変化させたロゴパターンを作成。

●市民プロジェクト・キュレーターによるプログラム

市内で長きに渡り創作活動を行っているアーティストや、アートプロジェクトを牽引してきたアート・コーディネーターがキュレーターとなり、市内全域で実施されるプログラム。その地続きの活動から独自のネットワークやコミュニティが育まれている。三者三様、それぞれの視点でアートをひらくプログラムが展開され、「さいたま国際芸術祭2023」を特徴づけている。

ライフスタイルにアートを。

「さいたまアーツセンタープロジェクト2023* (SACP2023*)」

日常生活のなかで、誰でもアートに参加する習慣を生み出す「アーツセンター」を創造するプロジェクト。2019年から約120ものプログラムを実施してきた経験をいかし、創造性・リアル・対話のある場を大切にしながらワークショップ、レクチャーや展示を行う。「展覧会プログラム」は、建物が登録有形文化財に登録している料亭からアーティストが集うギャラリーまで市内8カ所で展開される。場所×表現とのマッチングにも注目。また、「ウィークデーアーツプログラム」では水曜・金曜・土曜に音楽やアートに触れられるプログラムを用意。プロジェクトの拠点「氷川の杜ひろば(大宮図書館)」に設けられる「SACP BASE」。



浅見俊哉 ASAMI Shunya
市民プロジェクト・キュレーター

1982年、東京都生まれ。美術家・写真作家・造形ワークショップデザイナー。2006年、文教大学教育学部美術専修卒業。2004年より「時間」と「記憶」をテーマに写真作品を制作。2008年、埼玉県越谷市に「アートスペースKAPL(コシガヤアートポイントラボ)」を設立し、地域でのアートプロジェクトをスタート。2009年にSMF(サイタマミュージアムフォーラム)運営メンバーとなり、そのことが後に「SACP」を展開するきっかけに。「さいたまトリエンナーレ2016」SMF学校コーディネーター、「さいたま国際芸術祭2020」市民プロジェクト・コーディネーターをつとめる。



展覧会プログラム

「さいたまとあそぶ! —さいたまの人*土地*表現—」10/7(土)～12/10(日)

Arts Center 1 @ SACP BASE (氷川の杜ひろば)
浅見俊哉/石上城行

Arts Center 2 @大宮駅周辺商店数店
DamaDamTal

Arts Center 3 @ RaiBoC Hall 5階情報発信コーナー
山本 彌

Arts Center 4 @中央区役所
寿の色

Arts Center 5 @日本国登録有形文化財会席料理 二木屋
平川恒太

Arts Center 6 @マーブルテラス
テンギョー・クラ

Arts Center 7 @師岡制作所
鈴木のぞみ

Arts Center 8 @space845
遠藤一郎+未来美展6

ウィークデーアーツプログラム

音楽やパフォーマンス・アーツを鑑賞できる「深呼吸する水曜日」、アートの講座「金曜日の芸術学校」、造形ワークショップを行う「土曜アーツチャレンジ」と、週に3日「アートなスケジュール」が立てられる連続的プログラム。

スペシャルプログラム

作家と継続的に関わり表現することを学ぶアーツスクールプログラムを実施。演出家・武田 力による演劇づくりワークショップ、アーティスト・山内崇嗣と一緒に土器づくりを行う「さいたまドキ土器ワークショップ」、パフォーマンス・アーティストDamaDamTalによる参加型パフォーマンスイベントを開催予定。

●市民プロジェクト・キュレーターによるプログラム

さいたまの文化の星をつなぐ 「アーツさいたま・きたまち」

さいたま市に点在する、「盆栽」「漫画」「人形」「鉄道」をテーマにした施設をアートでつなぐプロジェクト。アーティストの角 文平、市川 平が大宮盆栽美術館、漫画会館、岩槻人形博物館、鉄道博物館で新作を発表し、施設間の「道(コース)」も複数の作家たちが手掛ける自転車や車がアート化。芸術祭開催中は、ガイドアーティストが「ART-Chari」でコースを引率するイベントも予定。イメージは、いくつもの星を渡り歩き、さまざまな出会いを経験していく『星の王子さま』。来場者をさいたまの"文化の星"をめぐるアートの旅に誘う。



CARt Camp&Caravan @さいたまトリエンナーレ2016 (2016年11月)



飯島浩二 IIJIMA Koji
市民プロジェクト・キュレーター

1973年、神奈川県生まれ。武蔵野美術大学卒業と同時に作家活動を始める。横浜中華街に「牙狼画廊」を開設し、アメリカでは「Gallery Popkiller」のプロデュースに携わり、日米交換プログラムを展開。5年のアメリカ滞在を経て、2011年に帰国。大宮にてNPO法人コンテンポラリーアートジャパンの理事として「CAJ. Artist in Residence」「アーツさいたま・きたまちフェスタ」を手掛ける。また、プロ格闘家としても活動。総合格闘技の世界チャンピオンを輩出するなど選手育成にも携わる。



展覧会プログラム

「さいたま市文化施設 味変企画
〈市内文化施設に現代アートのスパイスを〉」
10/7(土)～25(水)
*鉄道博物館のみ
10/11(水)～30(月)
大宮盆栽美術館、漫画会館、岩槻人形博物館、鉄道博物館にて、各館のテーマである「盆栽」「漫画」「人形」「鉄道」を題材にアーティストの角 文平、市川 平が新作を展示。

イベントプログラム

「CARt-SAITAMA 2023」
「味変企画」の複数の展示会場を結ぶ道をアートカーで走行。
[参加作家] 飯島浩二 / 市川 平 / 上野雄次 / 岡本光博 / カッパ師匠 / 李旭 & 細井えみか ほか

「ART-Chari 2023」
ガイドアーティストが、「ART-Chari」でさいたま市内に点在する展示会場へと引率。
[参加作家] 阿目虎南 / 飯島浩二 / 市川 平 / 牛島達治 / 大野公士 / 久野彩子 / 佐藤時啓 / 佐塚真啓 / 樋口保喜 / shin-sei&ONIGIRI

「さいたまアーティスト・イン・レジデンスプログラム①岩槻プログラム」
岩槻区のアートスペース「space 845」で滞在制作を行ったアーティストたちが、岩槻人形博物館で作品を発表。
[参加作家] コン・シデン / 阿目虎南
[ゲストパフォーマー] 谷口 舞
[コーディネーター] 利根川 兼一

「さいたまアーティスト・イン・レジデンスプログラム②CAJ-AIRプログラム」
西区のアートスペース「CAJ-AIR」が「味変企画」「CARt-SAITAMA 2023」「ART-Chari 2023」に参加するアーティストたちの滞在拠点に。作品メンテナンスや会議などアーティストたちの日常を公開。

●市民プロジェクト・キュレーターによるプログラム

まちの創造力が浮かび上がる「創発 in さいたま」

「創発 in さいたま」は、さいたま市内で活動する画廊や美術家に声をかけ、ふだんバラバラに行われている展覧会が一堂に会するというもの。2008年、都内で展覧会を行うさいたま県内の美術家たちに声をかけ、県内で一斉に行ったプロジェクトがその原点にある。その後、「美術と街巡り・浦和」(2016～)、「美術と街巡り事業」(2020)の継続を経て、今回のプログラムが実現した。「創発 in さいたま」では市内14カ所の画廊や公共施設等で展覧会が行われる。



松永康 MATSUNAGA Ko
市民プロジェクト・キュレーター

1957年、埼玉県生まれ。アート・コーディネーター。武蔵野美術大学卒業後、埼玉県立近代美術館学芸員、国際芸術センター青森総括主任学芸員、横浜美術短期大学(現・横浜美術大学)非常勤講師を経て、現在、NPO法人コンテンツポラリーアートジャパン理事、武蔵野美術大学非常勤講師。「さいたま美術家展(創発)プロジェクト」(2008)、「美術と街巡り・浦和」(2016)、「美術と街巡り事業」(2020)を展開。



展覧会プログラム

- 『ONVO SALON × Gallery Pepin - 今月の1枚- #36 柳早苗』
[柳早苗]
10/1(日)～12/26(火) ONVO SALON URAWA
- 『ko-u-ki-shi-n「まだ見ぬ、わたしたち」』
[ko-u-ki-shi-n]
10/7(土)～29(日) STAND COFFEE コトコト Gallery- ⑧
- 『チャ・スンオン展』
[チャ・スンオン]
10/7(土)～15(日) つきのみちくさ
- 『またお会いしましょう-対極を超えて』
[奥村拓郎/熊谷美奈子/倉石文雄/塩崎由美子/須惠朋子/高草木裕子/高島芳幸/田口輝彦/田中宏美/中村真理/長谷川隆子/平丸陽子/藤原京子/古澤優子/村山之都/渡辺伸(16名)]
10/7(土)～15(日) 埼玉会館第1・2展示室
- 『埼玉会館エスプラナード展 2023』
[石上城行/尾形勝義/香月人美/高島芳幸/高田芳樹/田中千鶴子/中村幸子/橋本真之/細川麻美子/本多真理子/松枝美奈子/むー村井知之/柳井嗣雄(13名)]
10/7(土)～11/5(日) 埼玉会館エスプラナード他
- 『宮嶋結香展』
[宮嶋結香]
10/7(土)～28(土) 柳沢画廊
- 『国際野外の表現展秋ヶ瀬 2023』
[赤松 功/秋山秀馬/イ・ソングジュ/イジマフヒト/石坂孝雄/大矢りか/小野寺優元/木村勝明/児玉士洋/小林ナオコ/長野真紀子/沼田直英/根木山和子/望月月玲/山崎美樹(15名)]
10/7(土)～17(火) 秋ヶ瀬公園/プラザウエスト・ギャラリー
- 『MOYAN「周縁の身体」展』
[MOYAN]
10/7(土)～11/4(土) 氷川参道ギャラリー
- 『Women's Lives 女たちは生きている - 病い、老い、死、そして再生』
[一条美由紀/菅 実花/岸がおる/地主麻衣子/須惠朋子/本間メイ/松下誠子/山岡さ希子(8名)]
10/9(月祝)～22(日) プラザノース・ノースギャラリー
- 『てれどろ 2023』
[吉武道多]
10/12(木)～29(日) ギャラリー健
- 『安部典子展』
[安部典子]
11/6(月)～19(日) ギャラリー彩光舎
- 『2023CAF ネビュラ展-埼玉前衛からCAF ネビュラへ』
[青木孝子/青木俊子/赤松 功/荒井喜好/新井知生/井崎聖子/伊藤克広/犬飼三千子/イマイ恵子/上田貞子/植野智子/ウチダミズホ/大島幹/大島由美子/大西房子/奥野由利/尾崎ゆみ/小澤はるみ/小田原佳美/おづかし/小野寺恵美/小野寺優元/鹿島 寛/菅野美榮/木島隆夫/金原京子/倉藤紀子/小金富美子/五嶋 稔/古山由樹/齋藤英和/五月女幸雄/坂谷和夫/坂本伸市/佐藤淳一/佐藤洋子/重村三雄/菅野純子/硯川秀人/硯川有紀/清野光男/高木康夫/鷹塚榮峰/高橋輝夫/鷹嘴 直/高山典子/田島和子/田島 環/玉田香奈子/鶴巻美智子/徳永陶子/豊島淳子/クレール・ド・ジャヴァニャック/中川知美/長沢晋一/中嶋令惠/永田ケイ子/仲野 真/中村齋子/中谷れい子/中吉京子/新居妙子/野口真木雄/野口真理/野原一郎/萩原万里子/幡谷フミコ/早川由利子/林正彦/平野雅子/広瀬弘子/藤下 覚/藤原洋次郎/星 晃/星加民雄/穂積毅重/本田貴侶/松尾一男/松丸健治/松本安良/南 照子/峰岡 順/宮下泉/百瀬裕明/森田順子/森本恭代/安田 淳/やはた文明/山本和子/ゆうこ・ゆう/よだみちよ/渡辺武郎(92名)]
11/1(水)～12(日) 埼玉県立近代美術館一般展示室
- 『斎藤真起個展「雨さえ明るい」』
[斎藤真起]
11/1(水)～19(日) STAND COFFEE コトコト Gallery- ⑧
- 『木村真由美展』
[木村真由美] 11/11(土)～12/2(土) 柳沢画廊
- 『宇野之雅展』
[宇野之雅] 11/11(土)～12/9(土) 氷川参道ギャラリー
- 『金沢健一 延長線上的マリオネット』
[金沢健一]
11/16(木)～26(日) さいたま市文化センター
- 『白屋の不安と憂鬱』
[勝又豊子/小林雅子/永原トミヒロ]
11/22(水)～12/3(日) プラザノース・ノースギャラリー
- 『高草木裕子展 タカ・タカ・タカ』
[高草木裕子]
11/29(水)～12/10(日) STAND COFFEE コトコト Gallery- ⑧
- 『アートミーティング at さいたま国際芸術祭』
[石塚 亮/今井真由子/齋藤裕一/佐久間竜斗/佐々木省伍/柴田鋭一/杉浦 篤/杉浦公治/田中勝彦/土田学/手塚里美/松島菜月/宮川佑理子(13名)]
11/29(水)～12/3(日) 埼玉県立近代美術館一般展示室
- 『素描展-エル・ボエタ教室講師による-』
[青木美和/新井 隆/上田耕造/大久保佳代子/小野月世/コヤマ大輔/張学平/中井昭一/山根さちえ/横島庄司(10名)]
12/1(金)～9(土) Gallery エル・ボエタ

公募プログラム

さいたま国際芸術祭の「共につくる、参加する」というコンセプトのもと、アーティストや団体等による、テーマ「わたしたち」を踏まえた市内で展開する文化芸術活動を公募。61件の応募から7事業を選出。

※各事業内容等の最新情報は随時更新。詳細は公式Webサイトへ。

「しまった写真展(仮)」

hash out project

10/14(土)～11/12(日)

会場 | 未定

携帯で勝手に撮ってしまった写真をヴァナキュラー写真と仮定し、来場者からデータ内の写真を集めその場で印刷・展示。壁等に自由に貼り付けてもらい会場自身が作品となる。ZINE制作体験等も実施。

「アートへのはじめのいっぽ!行ってみよう!さいたま国際芸術祭【子ども向けアート鑑賞会】」

大宮こども部

10月下旬～11月末

会場 | 芸術祭会場

子ども対象の対話型鑑賞ツアー。楽しみ方や過ごし方を知り、鑑賞を楽しむ場をつくる。多様な表現を多角的に感じることで「アートへの入り口」となるよう芸術鑑賞への間口を広げる。

「和紙障子プロジェクションマッピング『大宮曼荼羅』」

坂根大悟

11/23(木)～26(日)

会場 | 盆栽四季の家

裏側に投影光を透過しない和紙障子に映すプロジェクションマッピング。表にはさいたま市の歴史や文化を、裏には現代のさいたま市のイメージをカラージュ映像として投影。

「シャボン da さいたま～レンズの向こうのわたしとワタシ～」

チームシャボン

11/3(土)～12/10(日)のうち、金・土・日・祝日開催

会場 | STUDIO・45

シャボン玉を自分に重ね、カメラで「わたし」が「ワタシ」(シャボン玉)を写す。来場者が撮影した作品を会場内に展示する参加型インスタレーション。シャボン玉をつくるワークショップ等も開催。

「写真ワークショップ『ふおっと見沼?』・「作品展『見沼の愛』」

田島均

10/11(水)～11/11(土)

※ワークショップは期間中1日実施。開催日は未定(10月開催)

会場 | コンドウハウス Kon キッチン

見沼を撮影スポットにした市民参加型のワークショップ。参加者が発見した見沼の良さを撮影し写真を使った作品を制作。同時に、見沼の自然を中心とした作品を展示した「見沼の愛」展を開催。

「In our homeland(仮)」

名取萌音

11月中の2日間

会場 | 未定

低空エアリアルユニット「窓」による物語をベースとしたサーカスのパフォーマンス作品。公園内に吊り具を設置し、一定のエリアをめぐる移動型の作品を上演する。年齢に関わらず楽しめる鑑賞体験。

「さいたま市民らと創る映画『沼影プール』 in さいたま市 協働制作～公開プロジェクト」

ハイドロプラスト

出演者募集7月、ワークショップ・撮影8～9月、上映会12月

会場 |

映画制作の主な拠点: さいたま市内 上映: 浦和コミュニティセンター

閉鎖・解体が決定している沼影市民プールを主なロケ地とし、「死の受容のプロセス」を提唱するキューブラー・ロスの著書を参照しながら、「再開発」をテーマとした映画制作を市民らと共に行う。

「公募プログラム審査員」

芹沢高志(審査員長/さいたま国際芸術祭2023プロデューサー)、大越久子(埼玉県立近代美術館学芸員)、滝口明子(うらわ美術館学芸員)、遠山昇司(さいたま国際芸術祭2020ディレクター)、久野敦子(公益財団法人セゾン文化財団常任理事)、川田泰則(さいたま国際芸術祭2023事務局長)、森隆一郎(アーツカウンシルさいたまプログラムディレクター)

応援プロジェクト

本芸術祭の開催趣旨に賛同し、テーマである「わたしたち」を踏まえた文化芸術に関連した事業を認証し、広報活動の相互協力を行う。



市民サポーター

さいたま国際芸術祭市民サポーターは、2016年の第1回開催から継続的に活動している。芸術祭を契機に出会った多様な人々が、芸術祭を支援しともに作りあげる。月例で行う情報交換・交流の場のサポーターミーティングをはじめ、アーティストへの協力、市内文化芸術に関する調査などの自主的な活動を通じて、自由な発想でコミュニティを拡大・継続させる。

「全国芸術祭サポーターズミーティング in さいたま」開催

全国各地で開催される芸術祭におけるサポーター(ボランティア)活動を担う者同士が一堂に会し、交流する。さいたまの芸術祭の楽しみ方を伝え、各地のサポーターの意義やあり方とともに考えることで、サポーター活動をさらに発展させる。

開催日 | 11/4(土)

連携プロジェクト

さいたま市の魅力ある文化芸術資源と連携して展開するプロジェクト。さいたま市内の多彩な文化施設で行われる文化芸術事業や、開催エリア周辺の商店街や企業等と連携し、さいたま文化の発信やまちの活性化を実現。

文化施設連携事業

大宮盆栽美術館

「さいたま市文化施設 味変企画〈市内文化施設に現代アートのスパイスを〉」

10/6(金)～25(水)

主催 | さいたま国際芸術祭実行委員会
市民プロジェクト・キュレーター飯島浩二が手掛けるプログラム。角 文平による鉄塔盆栽シリーズと、市川 平による『星の王子さま』に登場するバオバブの木にインスピレーションを得て制作された巨大な光るオブジェを展示予定。

漫画会館

「さいたま市文化施設 味変企画〈市内文化施設に現代アートのスパイスを〉」

10/7(土)～25(水)

主催 | さいたま国際芸術祭実行委員会
市民プロジェクト・キュレーター飯島浩二が手掛けるプログラム。角 文平による二宮金次郎像をオマージュした小学生像「二ノミヤくん」と、市川 平による日本近代漫画の祖・北沢楽天の作品を展示する漫画会館に特殊照明を用いて、光と影のコラボレーションを図る。

岩槻人形博物館

「さいたま市文化施設 味変企画〈市内文化施設に現代アートのスパイスを〉」

10/7(土)～29(日)

主催 | さいたま国際芸術祭実行委員会
市民プロジェクト・キュレーター飯島浩二が手掛けるプログラム。角 文平と市川 平による、人形制作の過程で用いられる型枠および型抜き作業から発想を得た、特殊照明装置とベルトコンベアーを雛人形とかけ合わせたアート作品を展示。

鉄道博物館

「さいたま市文化施設 味変企画〈市内文化施設に現代アートのスパイスを〉」

10/11(水)～30(月)

主催 | さいたま国際芸術祭実行委員会
市民プロジェクト・キュレーター飯島浩二が手掛けるプログラム。市川 平制作の移動式光源装置(電車)と角 文平による切り絵作品(アルミ板)が織りなす光と影が会場壁面や柱に映し出され、さいたまの物語をめぐっていく「さいたまアートライン」を展示。

宇宙劇場

「芸術になった星空 ゴッホ『ローヌ川の星月夜』」

10/1(日)～12月末

主催 | さいたま市宇宙劇場

10/1(日)、11/5(日)、12/3(日)の各16:30

から『星空の時間』にて芸術祭コラボレーション企画を放映予定。プログラムの前半に星空解説、後半のテーマ解説部分にて、ゴッホが描いた『ローヌ川の星月夜』を巡る星座の謎に迫る特別なプログラムを実施。

※その他の開館日においてもスケジュールによって『星空の時間』の中で放映する場合あり。

彩の国さいたま芸術劇場

スケーパー企画における連携

10/7(土)～12/10(日)

主催 | 公益財団法人埼玉県文化芸術振興財団
ディレクター目[mé]による企画「スケーパー(SCAPER)」を、彩の国さいたま芸術劇場ディレクターの近藤良平が演出。近藤良平監修によるスケーパーが、芸術祭会期中さいたま市内に展開される。

※スケーパーは、他にも複数のクリエイターが演出し、連日多数のスケーパーが市内に現れる予定。

青少年宇宙科学館

「KAGAYA 講演会」

11/26(日)

主催 | 青少年宇宙科学館

星空写真家、プラネタリウム映像クリエイターのKAGAYAによる講演会。

埼玉会館

「埼玉会館エスプラナード展 2023」

10/7(土)～11/5(日)

フォーラム「まち・みち・たてものを愛でる・いじる・生かす」×第10回 前川 國男建築セミナー 10/9(月・祝)

主催 | さいたま国際芸術祭実行委員会

市民プロジェクト「創発inさいたま」の一環として、埼玉会館の屋内外を使った展覧会「埼玉会館エスプラナード展 2023」、旧浦和宿周辺の街並とその中心にある埼玉会館についてフォーラムやガイドツアーを行う「埼玉会館と浦和の街」を実施。

埼玉県立近代美術館

企画展「イン・ピトウィーン」
「アーティスト・プロジェクト #2.07」

10/14(土)～2024/1/28(日)

主催 | 埼玉県立近代美術館

企画展「イン・ピトウィーン」では、早瀬 龍江、林 芳史など、当館収蔵作家にゲストアーティストを加えた計4名の作品を紹介。日常や歴史、国境など、さまざまな境界の間で思索と実践を続けるアーティストたちの軌跡をたどる。「アーティスト・プロジェクト #2.07」では、異なる素材を重ね合わせ、多重の境界を持つ彫刻作品を制作する永井天陽を紹介。

うらわ美術館

「さいたま市の美術家展2023」

11/8(水)～18(土)

主催 | さいたま市美術家協会

さいたま市ゆかりの美術家による展覧会。

まちなか活性化事業

埼玉大学

「埼玉大・藝大協働プロジェクト『サイトシーイング・バスカメラ』によるカメラ空間体験バスツアー」

10/21(土)、22(日)

会場 | 埼玉大学・プラザウエスト

主催 | さいたま国際芸術祭実行委員会

不思議なカメラ空間を体験できる観光バスを運行。

さいたま市美術家協会

「さいたま市の美術家展2023」

11/8(水)～18(土)

主催 | さいたま市美術家協会

うらわ美術館にて、さいたま市ゆかりの美術家による展覧会を開催。

さいたま市文化協会

「第16回文化フェスティバル」

展示 | 11/17(金)～26(日)

※11/22(水)を除く

発表 | 12/3(日)

お茶席 | 12/3(日)

RaiBoC Hall(市民会館おおみや)にて俳句、陶芸、美術、いけばな、音楽、吟剣詩舞、舞踊などの展示、発表。

ソニックシティ

「第140回さいたま定期演奏会
日本フィルハーモニー交響楽団」

11/18(土)

主催 | 公益財団法人埼玉県産業文化センター
日本フィルハーモニー交響楽団による定期演奏会。

東日本電信電話株式会社

10/7(土)～12/10(日)

メイン会場(旧市民会館おおみや)に大型モニターを設置し、芸術祭リアルタイムにドキュメンテーションするプログラムを実施。

株式会社埼玉りそな銀行

さいたま営業部

「うらわ美術館連携事業
浦和絵描き展」

主催 | 埼玉りそな銀行 さいたま営業部
協力 | うらわ美術館

うらわ美術館の協力のもと、埼玉りそな銀行所蔵の浦和絵描きの絵画展を実施。

株式会社武蔵野銀行

M's SQUARE

「街をかざるエクストラペットボトルの見た夢は」

11/23(木・祝)～12/10(日)

主催 | 武蔵野銀行・さいたま国際芸術祭実行委員会

市民プロジェクト「創発inさいたま」街をかざるエクストラの一環として、美術家の金原京子が子供たちと共に創作活動を実施。その中で制作された作品を本店2階のM's SQUAREにて展示するとともに、一般の方を対象としたワークショップを併せて実施。

NHKさいたま放送局

「テレビのカケラでなにつくる?」

主催 | 日本放送協会さいたま放送局

NHKの番組を彩る美術セットの廃材を使って自分ならではのタカラモノを作るワークショップ。番組に関わる美術スタッフと一緒に世界にひとつのオリジナル作品を作りNHKさいたま放送局で展示。

浦和PARCO

「子どもの夢花
～龍に乗って天空へ飛ぶ～」

10/18(水)～11/5(日)

主催 | さいたま国際芸術祭実行委員会

市民プロジェクト「創発inさいたま」街をかざるエクストラの一環として、美術家の早川聡子が子供たちと共に創作活動を実施。その中で制作された作品を浦和PARCO4階にて展示。

さいたま市内商店街

メイン会場周辺の商店街を中心としたまちの文化的な魅力を発掘するガイドマップを作成。

さいたま市文化振興事業団

7月～12月

主催 | さいたま市文化振興事業団

さいたま市文化センター等で行われる自主事業を連携プロジェクトとして実施。

庁内連携事業

9月～12月

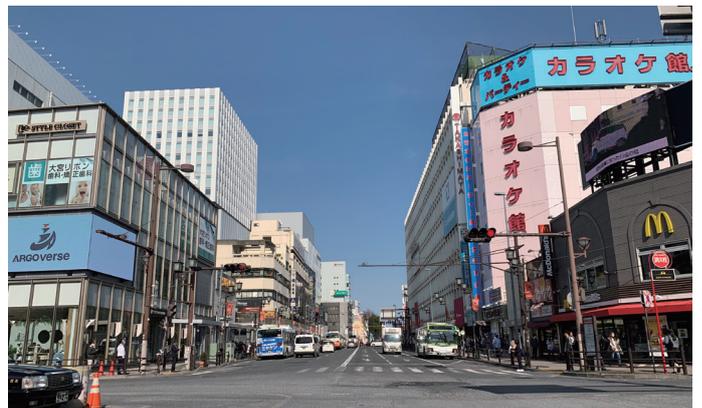
図書館や学校などの教育委員会との共同企画や各区役所で行われる「政令指定都市移行・区制施行20周年事業」を連携プロジェクトとして実施。

開催エリア

鑑賞者に委ねられた選択
メイン会場への2通りのルート



アーチ構造の屋根が特徴的な「さいたま新都心駅」



新旧さまざまな店が軒を連ねる「大宮駅」前

「さいたま国際芸術祭2023」へのアクセスには、「さいたま新都心駅」と「大宮駅」の2つの選択肢がある。どちらの駅もメイン会場である「旧市民会館おおみや」まではほぼ同距離。2000(平成12)年に開業した「さいたま新都心駅」を降り立ち、整備された近代建築を横目に歩いていくと、趣のある氷川参道に出る。一方、1885(明治18)年に開業した「大宮駅」を出ると「さいたま新都心駅」とは対象的に、昭和の残り香を漂わせるビルに飲食店がひしめき合い、ファストフードチェーン店の横に立ち飲み屋が並ぶ。どちらの駅からアクセスするかで、来館者が受ける芸術祭の印象も異なり、その選択肢は来館者自身に委ねられる。



メイン会場(旧市民会館おおみや)は会期中変化し続ける

メイン会場アクセス

旧市民会館おおみや

(さいたま市大宮区下町3-47-8 / 「さいたま新都心駅」「大宮駅」より徒歩約15分)

※メイン会場への入館にはチケットが必要です。

※メイン会場には駐車場はありません。ご来館の際は公共交通機関をご利用ください。

会場

メイン会場



旧市民会館おおみや

大宮区下町

メイン会場「旧市民会館おおみや」は、1970(昭和45)年に完成し、2022年3月の閉館に至るまで半世紀余り“市民のハレの舞台”を支え、多くの人々に親しまれた劇場。閉館以降閉ざされていたその扉が芸術祭開催に伴い65日間ふたたび開かれる。目[mé]がディレクションを手掛けるメイン会場には、現代美術家、研究者、編集者、演出家や盆栽師など、さまざまなアーティストが参加し、多様な公演や展示作品を連日展開する。また、公演の準備やリハーサルなどの様子も公開。展示作品の中には会期中に変化するものもある。“動き続ける会場”として、訪れる度にその表情を変える。

●大宮区下町 3-47-8

市民プロジェクト・
連携プロジェクトの
主な会場



RaiBoC Hall

(市民会館おおみや)

大宮区大門町

大宮のまちの個性をいかし、市民の主体的な文化芸術活動を支えるべく、2022年にオープン。大ホール、小ホール、展示室、集会室、スタジオなどを備え、コンサートや演劇、イベント会場として利用されている。「RaiBoC(レイボック)」とは、大宮地域を象徴する文化「Railway(鉄道)」「Bonsai(盆栽)」「Cartoon(漫画)」からの造語。

●大宮区大門町 2-118 [大宮門街4~8階]



氷川の杜ひろば (大宮図書館)

大宮区吉敷町

2019年、新大宮区役所に完成した大宮図書館。1階エントランス、氷川の杜ひろばから2階図書館エントランスへ、さらに3階図書館オープンスペースへと吹き抜けを配置。スパイラル状のオープン空間が交流を促す憩いの場を提供している。

●大宮区吉敷町 1-124-1



大宮盆栽美術館

北区土呂町

世界初の公立の盆栽美術館。盆栽文化振興の核となる施設として、世界に誇る盆栽の名品を展示し、国内外に向けて盆栽文化を発信。盆栽に親しむ機会を提供するとともに、盆栽を介して国際交流や愛好家との交流促進も積極的に行っている。

●北区土呂町 2-24-3



漫画会館

北区盆栽町

日本近代漫画の祖・北沢楽天の晩年の邸宅跡地に、漫画文化を育むべく1966(昭和41)年に誕生した日本初の漫画に関する公立美術館。現代マンガの企画展や、北沢楽天の作品を展示している。「北沢楽天漫画大賞」も開催。

●北区盆栽町150



岩槻人形博物館

岩槻区本町

日本有数の人形産地であるさいたま市岩槻区に、日本初の人形専門公立博物館として2020年に開館。人形や人形文化に関する資料の収集・保存、調査研究を行い、展覧会や教育普及活動を通して、日本文化の中に息づく人形の美と歴史を、国内外に広く発信している。

●岩槻区本町6-1-1



鉄道博物館

大宮区大成町

Photo | 松本和幸

JR東日本創立20周年記念事業として、2007年に開館。日本および世界の鉄道に関わる遺産・資料に加え、国鉄改革やJR東日本に関する資料を体系的に保存、展示。屋内外には42両もの車両が展示され、鉄道文化の振興と普及啓発を行う重要施設となっている。

●大宮区大成町3-47



埼玉県立近代美術館

浦和区常盤

北浦和公園に1982(昭和57)年開館。モネ、シャガール、ピカソなどの海外の巨匠から日本の現代作家まで、優れた美術作品をコレクションし、展示。また、ユニークなテーマを設けた企画展のほか、自由に座れるグッド・デザインの椅子も数々紹介している。

●浦和区常盤9-30-1



うらわ美術館

浦和区仲町

“文教のまち”として長くその文化を育んできた浦和に2000年誕生。「地域ゆかりの作家」と「本をめぐるアート」の2つの方針による作品収集・研究を主体とした個性的かつ積極的な活動により、地域の文化創造の拠点になることを目指す。

●浦和区仲町2-5-1 浦和センチュリーシティ3階



さいたま市文化センター

南区根岸

1985(昭和60)年に開館し、さいたま市が発足以降は「さいたま市文化センター」の名称で市民に親しまれる。市民の文化活動の拠点として、大ホール、小ホールでは音楽・演劇・舞踏・古典芸能などの催し物、多目的ホールや集会室は会議・集会に利用されている。

●南区根岸1-7-1

メイン会場チケット

メイン会場の展示、大ホールの公演を鑑賞するにはチケットが必要です。1DAYチケットに加え、日々表情を変えるメイン会場に、会期中何度でも入館できるお得な「フリーパス」(特典付き)も販売。

| | 前 売 | | 当 日 | |
|----------|--------|--------|--------|--------|
| 1DAYチケット | 一般 | 1,500円 | 一般 | 2,000円 |
| | さいたま市民 | 1,000円 | さいたま市民 | 1,500円 |
| フリーパス | 一般 | 4,000円 | 一般 | 5,000円 |
| | さいたま市民 | 2,500円 | さいたま市民 | 3,500円 |

※「1DAYチケット」は入館日のみメイン会場を鑑賞可能(再入館可)
※「フリーパス」は会期中何度でもメイン会場を鑑賞可能
※会期中、メイン会場受付にて追加料金(一般3,000円/さいたま市民2,000円)をお支払いいただくことで「1DAYチケット」から「フリーパス」へアップグレードができます
※「1DAYチケット」「フリーパス」はメイン会場のみ入館可能。その他の会場は別途入館料がかかる場合があります
※高校生以下、障害者手帳をお持ちの方及び付き添いの方(1名)は無料

※前売販売期間 | 2023年7月12日(水)～10月6日(金)
※さいたま市民割チケットは、さいたま市内在住・在勤・在学の方がご購入いただけます。窓口にてご購入の際は市内に在住・在勤・在学していることが確認できるものをご提示ください
※チケットの料金にはメイン会場大ホールで実施される演目の鑑賞料が含まれています。ただし、演目により別途予約が必要な場合があります。詳しくは公式WEBサイトにてご確認ください
※チケットの払戻し及び再発行はいたしません

購入方法

1 公式WEBサイト

前売チケット・当日チケットともに販売

販売期間 | 2023年7月12日(水)～12月10日(日)

※2023年7月12日(水)～10月6日(金)は前売販売期間



<https://artsaitama.jp/tickets>

※チケットの購入に関する詳細は公式WEBサイトへ

2 さいたま市内の文化施設およびコミュニティ施設

前売チケットのみ販売

販売期間 | 2023年7月12日(水)～10月6日(金)

※チケット販売施設の詳細は公式WEBサイトへ

3 メイン会場(旧市民会館おのみや)

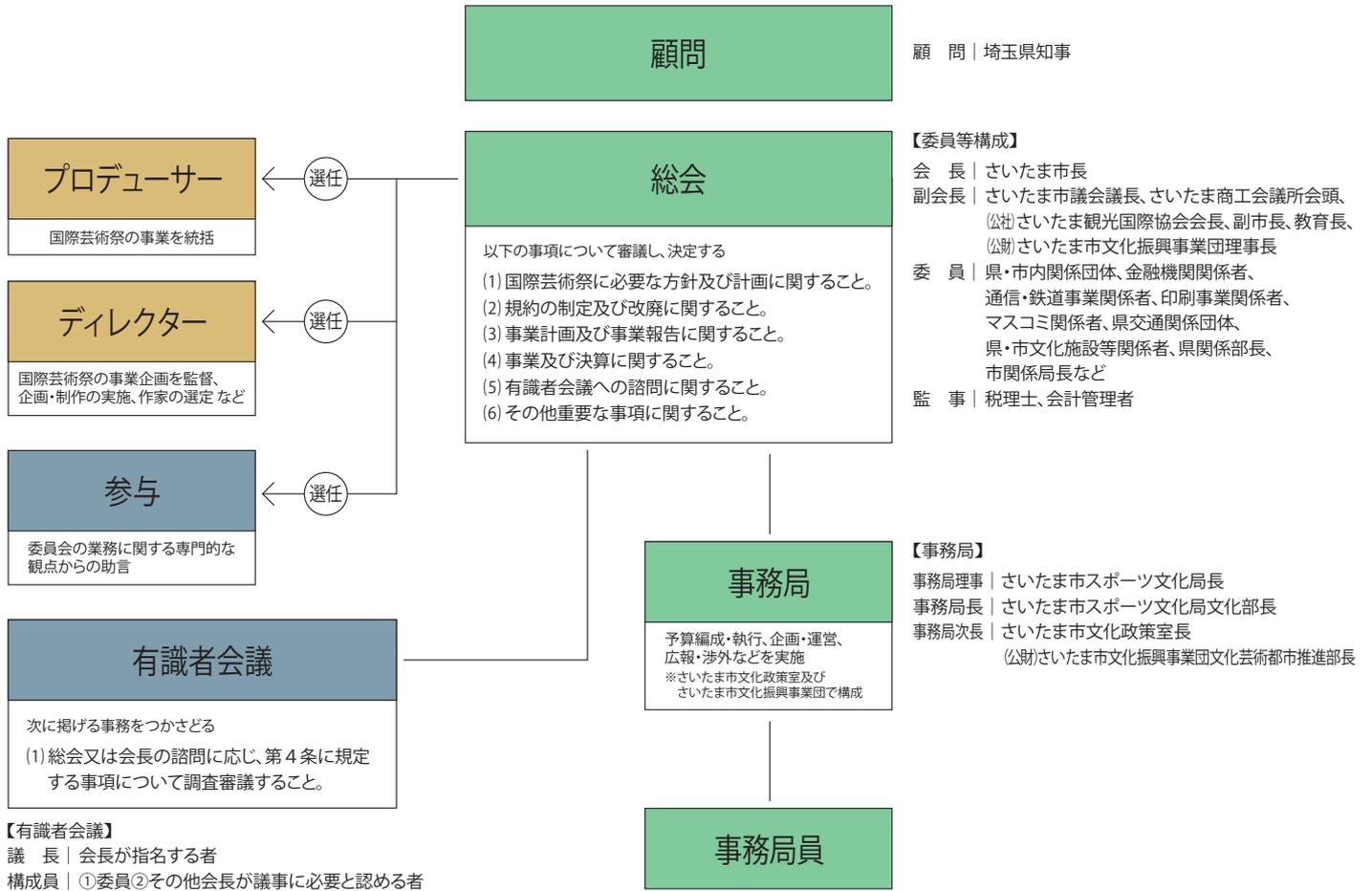
当日チケットのみ販売

販売期間 | 2023年10月7日(土)～12月10日(日)

●大宮区下町3-47-8 | 開館時間 (日・火～木) 10:00～18:00 [最終入館は閉館30分前まで]
(金・土) 10:00～20:00 [最終入館は閉館30分前まで]
休 館 月曜 [祝日の場合は開館、翌日休館]

実施体制

さいたま国際芸術祭実行委員会



1 — 実行委員会組織図・委員会構成団体

2022年1月に実行委員会を設立して以降、事業運営や広報活動に対する教示を受けながら、総会を定期的に開催し、企画や事業費などについて審議・決定。今後もオールさいたまで取り組むという趣旨のもと、埼玉県、文化団体、経済団体、大学などの幅広い関係者の知見、人材、人脈、資金等をフルに活用していく。

《構成団体(2022年3月30日実行委員会第2回総会時点)》
さいたま市、埼玉県、さいたま市議会、さいたま商工会議所、公益社団法人さいたま観光国際協会、さいたま市教育委員会、公益財団法人さいたま市文化振興事業団、埼玉県立近代美術館、独立行政法人国際交流基金、公益財団法人東日本鉄道文化財団鉄道博物館、大学コンソーシアムさいたま、さいたま市自治会連合会、さいたま市商店会連合会、公益社団法人埼玉中央青年会議所、株式会社埼玉りそな銀行、株式会社武蔵野銀行、日本郵便株式会社

社さいたま市内郵便局、東日本電信電話株式会社埼玉事業部、東日本旅客鉄道株式会社大宮支社、東武鉄道株式会社、埼玉高速鉄道株式会社、凸版印刷株式会社、日本放送協会さいたま放送局、株式会社テレビ埼玉、株式会社埼玉新聞社、株式会社FM NACK5、株式会社ジェイコム埼玉・東日本、一般社団法人埼玉県バス協会、一般社団法人埼玉県乗用自動車協会、さいたま市文化協会、公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団、公益財団法人埼玉県産業文化センター、税理士法人レヴ・ナス

2 — 有識者会議 (さいたま・アート・フォーラム)

芸術祭の事業実施にあたり、プロデューサー、ディレクターと事務局との連絡・調整を図る場としていくなど、事業の円滑な実施に寄与していくため「有識者会議(さいたま・アート・フォーラム)」を必要に応じて開催。

<https://artsaitama.jp>



お問い合わせ

さいたま国際芸術祭実行委員会事務局
(公益財団法人さいたま市文化振興事業団 国際芸術祭推進課内)

〒336-0024

さいたま市南区根岸1-7-1

TEL | 048-767-5411 (受付時間/火~土 9:00 ~ 17:00)

FAX | 048-767-5351

